様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 5 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006 年度～2008 年度
課題番号：18760485
研究課題名（和文）　中国書院建築の空間構成に関する場所論的研究

研究課題名（英文）　Topological Study on the Chinese Academy Architecture

研究代表者　足立　崇
（ADACHI TAKASHI）
大阪産業大学　工学部　講師
研究者番号：80309179

研究成果の概要：
書院志や地方志に見られる詩や文をとおして、嶽麓書院と背後の嶽麓山との関係について考察した。嶽麓山に登る文人たちは、飛来石において聖なる衡山を拝するとともにその風景によって開放されていた。また禹碑の前に立っては、いにしえの聖帝に想いをはせていた。文人たちは嶽麓山において、空間的、時間的に遠くの聖なるものを自らの近くに感じていたといえる。嶽麓山はそのように聖なるものを分有する山として、嶽麓書院の背後に意味を与えていたことを明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,000,000	0	1,000,000
2007 年度	800,000	0	800,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	210,000	2,710,000

研究分野：工学
科研費の分科・細目：建築学　・　建築史・意匠
キーワード：建築論

１．研究開始当初の背景

中国書院に関する中国国内の研究は、1920 年代より開始され 30 年代には発表論文も 40 編に及んだ。これは清末に廃れた書院が、学校制度の改革にともない見直されてきたことによる。しかし、その研究テーマは書院制度を扱ったものがほとんどであり、建築について問題にしたものは皆無にひとしかった。40 年代～70 年代にかけては、研究も低調で論文も 50 編を数えるにすぎない。一方、台湾では 70 年代になると台湾内の書院に関する研究が行われるようになった。80 年代に入

ると、中国でも書院研究が再び活発に行われるようになり、研究領域も広がりをみせるようになる。嶽麓書院の修復活動もこのころに行われ、建築に対する関心も嶽麓書院を中心にすこしずつ生まれてきた。楊慎初の『中国書院文化與建築』(2002)、『岳麓書院建築與文化』(2003) もこうした流れの中で生まれてきたものである。楊氏は嶽麓書院の修復にたずさわった建築学者であり、研究においても嶽麓書院の建築物の歴史的変遷を明らかにするなど、すぐれた業績を残している。しかし、そこで明らかにされているのは主に建築物の歴史的変遷であり、中国国内における書院建築に関する研究はまだ諸についたばかりである。豊富な文献資料に比して、さほど建築にかかわる研究が進んでいないのが現状といえる。日本でも中国書院に関する研究は行われてきたが、書院制度などの歴史学的研究が主であり、建築に関する研究は管見するかぎりではない。

本研究は、こうした背景のもと開始されたものであり、書院の設立に際してその立地する環境が重視されてきたことに着目し、建築やそれをとりまく環境の空間構成の人間学的意味を明らかにしようとするものである。本研究はそうした意味で書院研究の可能性を広げ展開させることになると考え開始された。

２．研究の目的

本研究は湖南長沙の嶽麓山に建つ嶽麓書院を主対象とする。嶽麓書院は宋より存続した最も歴史の古い書院の一つで、朱熹（1130-1200）や張栻（1133-1180)、王守仁（1472-1528）ともかかわりの深い中国を代表する書院である。長い歴史の中で戦火により何度も破壊されたが、各時代の山長（書院の長）によって再建され姿をかえつつ今日に至っている。現在目にすることのできる建築は大部分が清代に再建されたものであり、近年さらに全体的に修復され、失われていた建物や庭園なども修築されている。ここでは嶽麓書院に関する書院志や地方志、山長らの残した詩や文をとおして、建築空間や周辺環境の歴史的変遷をたどりながら、その空間構成の人間学的意味を明らかにするものである。

３．研究の方法

本研究では、現地において嶽麓書院の現状を調査し、嶽麓山に点在する書院周辺の旧跡や位置関係などを調査する。さらに、嶽麓書院にかかわる史料である『重修嶽麓書院圖志』（10 巻，明万歴 10 年[1590]）、『新修長沙府嶽麓書院志』（８巻，鏡水堂版，康熙 26 年[1687]）、『南嶽志』(26 巻, 乾隆 18 年[1753])、『嶽麓詩文鈔』(57 巻, 道光 10 年[1830])、『沅湘耆旧集』(道光 24 年[1844])、『続修嶽麓書院志』(4 巻，半学斎版，同治 6 年[1867])などの読解をとおして、書院の諸場所について詠まれた詩や文から重要な場所を抽出整理し、時代の変遷と照らし合わせながら空間構成の意味を明らかにしていく。

４．研究成果

嶽麓書院に関する書院志や地方志、山長らの残した詩文をとおして、嶽麓書院とその名の由来でもある背後の嶽麓山との関係について以下のように明らかにした。

（１）飛来石と嶽麓山

ここでは『重修嶽麓書院圖志』(10 巻，明民万歴 10 年[1590])、『新修長沙府嶽麓書院志』(８巻，鏡水堂版，康熙 26 年[1687])、『嶽麓詩文鈔』(道光 10 年[1830])、『続修嶽麓書

院志』（4巻，半学斎版，同治 6 年[1867]）、『沅湘耆旧集』（道光 24 年[1844]）に散見される嶽麓山の「飛来石」という石に着目した。「飛来石」に関する記述は『重修嶽麓書院圖志』に 3 カ所、『新修長沙府嶽麓書院志』に 7 カ所、『嶽麓詩文鈔』に 16 カ所、『続修嶽麓書院志』に 5 カ所、『沅湘耆旧集』に 4 カ所確認される。『重修嶽麓書院圖志』には「拝嶽臺在嶽麓山右二里許、有石方丈餘、俗呼為飛来石。土人於此望拝南嶽、名拝岳石。」とあり、『嶽麓詩文鈔』には趙忭が「拝嶽石」と題し、「片石倚中天、雲深鳥道間。人多祝堯壽、登此拝南山。案石在雲麓峰上、一名飛来石。」という詩をよんでいる。「嶽麓山水總記舊志」には「有石飛岩、外如伸螭首、面平如砥約二丈。士人竪石為柱為欄覆亭其上。拝衡嶽石下空深近。數丈瞷之毛髪皆竪。」とあり、さらに絶景の描写が続いている。また「雲麓峰圖説」には「五嶽祠後峻巖有石縦横二丈飛巖、外名飛来石。土人構亭於上瞻望衡嶽而拝、故又名曰拝嶽石。従石下曲阿森繡松杉掩、映山峙湘環又別、是一番大観矣」とあり、「嶽麓山賦」には「登嶽石而拝瞻恐後（真武殿下有拝嶽石平坦懸崖有廟）、俯瞰而岸崿如鱗、仰観而雲霞若綉嵐光擁翠、拓開天地之奇雲気漫空鎖断、塵寰之陋當斯時也」と「飛来石」からの絶景が記述されている。これらから「飛来石」は嶽麓山の第二峰雲麓峰の山頂にあり、その上には亭が建てられ、南嶽衡山を拝することのできる場所、「拝嶽石」となっていたことが分かる。蒋希禹は「飛来石」という詩で「巨霊劈山石、石砥平於掌。望望祝融峯、不盡真人想。」とよみ、衡山の中でも第一峰の「祝融峰」を望もうとしている。

ちなみに「飛来石」の上に亭を建てたのは「嶽麓山水總記舊志」では「士人」、「雲麓峰圖説」では「土人」である。『重修嶽麓書院圖志』には「土人」の場所であったのがやがて「士子」にとって「遊息大観」の場所となったとあるから、おそらくその土地の人々のみが知る場所であったのが、やがて「士人」にも広まり「遊息大観」の場所になったと考えられる。文献に見られるように文人たちは書院背後にひかえる嶽麓山に特別な思いを抱き、たびたび登っていたようである。その際、「飛来石」の上から南嶽衡山を拝し、衡山に連なる嶽麓山という場所を体認していたのだと考えられる。それは嶽麓山のふもとに建つ嶽麓書院の場所をも再認識することになったであろう。そしてそのように体認する場所が、もともとそこにあった場所でなく飛来した石「飛来石」の上であったということは、場所を問題とする本研究にとって興味深い。

（2）禹碑と嶽麓山

嶽麓山には「飛来石」の他にも多くの旧跡がある。道教の雲麓宮、仏教の麓山寺、禹碑、道士修練の場としての抱黄洞などがその代表的なものである。ここでは衡山とも関係のある禹碑に着目した。

禹碑は嶽麓山の第一峰禹碑峰山頂に位置しており、『長沙府志』、『重修嶽麓書院圖志』の図では、嶽麓書院を貫く中心軸の山頂に描かれている。禹はよく知られているように夏王朝の始祖として、儒家によって理想の帝王として尊崇される伝説上の聖王である。治水事業を完成し山川を整えたと伝えられる。そうした禹の碑が書院を貫く中心軸の嶽麓山頂にあるということは、書院にとって重要な意味をもっていたと考えられる。実際、『新修長沙府嶽麓書院志』には「大禹像」、「朱文公像」、「南軒張氏像」の三つの肖像が描かれているが、禹王の像は嶽麓書院の再興に尽力した朱熹（1130-1200）や張栻（1133-1180）よりも前に載せられている。また、「禹碑」

の模写や訳文も記載され、「禹碑」についての詩文が多数記載されている。

『新修長沙府嶽麓書院志』に呉道行の「禹碑辨」があるが、そこには「宋嘉定初何子一遊南嶽、遇樵者導引至碑所。始摹其本過長沙轉刻之嶽麓山頂。」とあり、江有溶の「大禹碑跋」には、「宋嘉定壬申何賢良子一得禹碑於岣嶁峰。何過長沙遂摹刻於嶽麓書院後巨石。此禹碑至於長沙之始也。」とある。共通して禹碑はもともと衡山の岣嶁峰にあったものを宋の嘉定年間に嶽麓山石壁に模刻したとしている。ちなみに唐代の劉禹錫は「禹碑」と題して「常聞祝融峯、上有神禹銘。古石琅玕姿、秘文螭虎形。」という詩をよんでおり、禹碑が衡山の祝融峰にあったとしている。いずれにせよ、それらはもともと嶽麓山にあったのでなく、聖山としての衡山にあったものを模刻したものであった。呉道行によればその後、ながく禹碑は人の目に触れることがなかったが、嘉靖 12 年[1533]に太守の潘によって世に知られるようになったという。当時すでに岣嶁峰（あるいは祝融峰）に禹碑はなく、唯一見ることのできたのが嶽麓山の禹碑であった。

劉禹錫によって「秘文螭虎形」と表現されているように、禹碑は古い文字で刻されており、読むことのできないものであった。明代の揚慎などが訳を試みているが、信頼できるものか定かでない。しかし、読むことのできない秘文で刻されているということが、むしろ禹碑の信頼性や神秘性を高めていたとも考えられる。『南嶽志』（26 巻　乾隆 18 年[1753]）にも嶽麓山の禹碑について模写や訳文だけでなく多くの記述や詩文が紹介されており、衡山においても禹碑が重要なものであったことが窺える。

ところで、嶽麓書院は明の正徳 2 年[1507]に呉世忠によって道林寺を壊した材料を使い建て直され、拡張されている。楊慎初氏によって指摘されているように、このとき呉世忠は風水にもとづいて書院の建て直しを始めている。それは『新修長沙府嶽麓書院志』におさめられている呉世忠の「興復書院劄」に「嶽麓書院風水背戻、所以屢興屢廃。今欲修理必須畧移向址方、可久長等。因據此為照修建書院、乃斯文盛事當差風水、人前去書院踏看山脉。」とあることに明らかである。このとき呉世忠が嶽麓山頂にある禹碑のことを知っていたかは定かでない。しかしその後の『長沙府志』（嘉靖版、乾隆版）、『重修嶽麓書院圖志』（1590）に描かれている風水図的な図に、禹碑が嶽麓書院を貫く中心軸の山頂に描かれていることに、禹碑によって嶽麓書院の背後に意味をもたせようとする意図が窺える。

（３）成果のまとめ

『嶽麓詩文鈔』に「飛来石上數峯青、遠眺衡陽近洞庭。人在半天尋勝入、紆回再憩禹碑亭。」という詩がある。嶽麓山に登る文人たちは飛来石において衡山を拝すると同時にその風景によって開放されていた。また禹碑の前に立っては、いにしえの聖帝に想いをはせていた。そのようにして空間的、時間的に遠くにある聖なるものを自らの近くに引き寄せたのであろう。嶽麓山はそのように聖なるものを分有する山として、嶽麓書院の背後に意味を与えていたのである。

嶽麓書院はいうまでもなく儒教を根本にした学問の場所であるが、建てられた環境は仏教や道教あるいは土着の信仰などが古くから重層的に織り込まれた歴史的環境であった。嶽麓書院と嶽麓山との関係をとらえるためには、そうした儒・仏・道の重層的意味についても考察していく必要があるだろう。また、嶽麓書院の前には衡山と洞庭湖を結ぶ

湘江が滔々と流れている。この湘江流域は「瀟湘八景」の発祥地としても知られる。清代には山長の羅典によって嶽麓書院に園林がつくられ、その勝景は「嶽麓八景」と称され、多くの詩がよまれている。嶽麓書院と湘江との関係についても今後の課題である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計１件）
足立崇、嶽麓書院と嶽麓山、日本建築学会大会学術講演梗概集、2009

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
足立　崇（ADACHI TAKASHI）
大阪産業大学　工学部　講師
研究者番号：80309179

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：